

加藤直樹先生の研究業績の紹介

荒木 穂積*

加藤直樹先生の研究業績を紹介させていただきます。加藤先生は1969年、京都大学大学院を卒業され、人間発達に関する論文や著作を数多く発表してきておられます。研究対象は幅広く多分野に渡っていますが、そこで一貫しているのは発達保障の立場から現代の人間発達の危機にどのように立ち向かうかというクリティカルな視点で人間の発達を研究してこられたことです。最終講義の中でもそのことが述べられるかと思えます。一貫した、揺るがない視点を持って研究を進めてこられたのですが、その研究分野は3つのグループに分けることができるのではないかと思います。

第一の研究分野は、加藤先生は大学院に通うかわら、第一びわこ学園に心理判定員として勤められたご経歴がありますが、重症心身障害児や肢体不自由児など医療的ケアを必要とする子どもたちの研究です。加藤先生の研究の土台には「社会的弱者」と言われる子どもたちの問題を一つの大事な視点として考えていくという立場が貫かれているかと思えます。1971年、加藤先生と高谷清先生の共著で『変革の医療』が発刊されました。重症心身障害児を医療の受け手として考えるという当時の見方を批判的に吟味し、医療の主体として見る必要があるのではないかと、それまでの見方を180度変えることをこの本の中で主張されています。今日ではそういう考え方は常識で、あたりまえになっていることですが、それを今から35年前に示されました。弱者の視点から出発しながら人間発達の問題を普遍的に展開することに精力的に努めてこられたかと思えます。

第二の研究分野は、人間発達を集団、仲間関係からとらえた研究です。加藤先生の研究業績の一つに「9、10歳の節」「9、10歳の質的転換期の研究」というユニークな研究があります。9、10歳というのは子どもたちがギャングエイジを形成して、自治的集団をつくり始める人生最初の時期に、自治的集団が人間の人格形成や人格発達にどういう影響を持つか。児童期、思春期、青年期と自治的な集団をくぐり抜けてどういう人格形成をしていくかを解明することなしに人間発達を論じることにはできないという鋭い洞察から研究を継続してこられたかと言ってよいのではないかと思います。最近では、この集団論を人格発達における自立論、人間の発達と自立とをかかわらせて発展させておられます。講義の中でも触れられるかと思えますが、加藤先生の言葉を借りると、人間の自立で大事な視点は依存的自立です。人間という存在は人間関係抜きに、集団の媒介なしには存在しないのです。人間的自立は集団を媒介にして達成されるが、同時に人間はいつでも依存的である。人

*立命館大学産業社会学部教授

人間発達の本質がそこにあるのだという指摘です。加藤先生は、人間は依存しあって生きていけばよいというふうに主張しておられるではありません。第三の研究テーマと関係しますが、人間個人が自立を達成していくことによって、今度は集団を媒介にした人間連帯によって社会を変革することができるという指摘です。人間が自立するとは集団を媒介にしつつ自分の所属する集団や社会をよりよく発展させていくための意欲と活動が、社会を発展させ、自立させることにつながる。それに自覚的に取り組むことによってまた人格発達が達成されるという関係を、ぜひ明らかにしていきたいという問題意識をもって仕事をされてきたと思います。

第三の研究分野は、集団をキーワードに、学校や職場、地域、国や地方自治体などの発展変革をどのように達成していくか。そのメカニズムを人間発達の視点から明らかにしていく必要があるという問題意識からの研究です。具体的には、施設における民主的な運営や管理をどうしていけばいいか、発達保障にかかわる人たちが力を出すためにはどういう労働のあり方、集団のあり方をめざすべきかという視点からの研究です。民主主義的な集団、即ち民主主義的な家庭、地域、学校をどうつくっていくか。そのことこそが真の人間の自立、社会の自立発展の発動的源泉になるという、個人の視点から社会変革の視点までを見通しての人間発達の研究を進めてこられたと思います。

加藤先生の研究とかかわってご紹介しておきたいことは、加藤先生は優れたコーディネーター、組織者であるということです。大学では大学改革の担い手として、自分が意見を出すことと同じくらい他の人の意見を聞き、さまざまな人たちの異なる意見をうまく一つにまとめて大きな力にしていられるのです。一見一致点がないように思える意見を大きく骨太にまとめていられる力量の持ち主です。人間発達の研究は範囲が広く、多くの人たちの協力、共同がないと実現しない領域だといっていてよいかと思いますが、そのことを身をもって教えてくださった、研究者として指導者としてリードしてくださった優れた先生です。

今後ともますますお元気で活躍くださることを祈念しつつ、簡単ですが研究業績の紹介とさせていただきます。